

近世の朝鮮王朝

今回学ぶこと

14世紀末、朝鮮半島では李成桂^{イソンゲ}が高麗を滅ぼして朝鮮王朝を建国した。この王朝は国を治めるための教えとして儒教、とくにそのなかでも朱子学^{りせいけい}を重視し、学問や独自の文化を発展させた。16世紀末には豊臣秀吉の軍事侵攻で大きな被害を受けたが、一時断絶していた日本との国交が17世紀初めに回復すると、以後260年ほどの間、平和的な関係を維持した。今回は近世の朝鮮王朝の歴史を儒教文化および日本との交流に注目しながら学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- 朱子学はいつ誰が唱えた儒教の理論なのかを調べてみよう。また儒教には朱子学以外にどのような理論や学問があるのかを調べてみよう。
- 朝鮮王朝時代に考案されたハングルとはどのような文字であるかを調べてみよう。
- 朝鮮国王が日本へ派遣した通信使とはどのような使節だったのかを調べてみよう。また、この使節が果たした役割について考えてみよう。

朝鮮王朝の建国

1392年、李成桂は高麗を滅ぼして新しい王朝を建国した。翌年には国号を「朝鮮」と定め、さらにその翌年、都を漢陽（現在のソウル）に移して漢城と改称した。李成桂はもともと朝鮮半島東北地方出身の武人で、高麗末期にさかんに朝鮮半島を襲った倭寇の撃退で功績を立てた人物である。彼は儒教のなかでもとくに朱子学を重んじ、国を治めるための教えに定め、都や各地に学校を建てて普及に努めた。官吏登用試験である科挙では朱子学の知識・教養が問われ、その合格者が官僚となって国政を運営した。彼らは両班^{ヤンバン}とよばれ、知識人階層^{くんみんせいおん}として学問や独自の文化を発展させた。15世紀半ばには民族独自の文字であるハングル（当時は「訓民正音」とよばれた）も作られた。



儒教文化の担い手としての士族・両班

朝鮮王朝は500年という長期間にわたって朝鮮半島を支配した。その間、日本との間にはおむね平和的な関係が維持された。15世紀以降、倭寇がほぼ沈静化すると、対馬の人々を中心にして、交易を求める日本人が多数朝鮮を訪れるようになり、朝鮮では南部に位置する釜山浦・ふざんぼ・フサンポ・せいほ・えんぼ・ヨムボ・チエボ・ヨムボの3つの港を開いて交易を認めた。ところが1592年、日本国内の統一事業を達成した豊臣秀吉が、明征服をめざして大軍を朝鮮半島に派遣した。

こうして始まった壬辰・丁酉の倭乱じんしん ていゆう わらん（文禄・慶長の役）により、朝鮮は全土にわたって甚大な被害を受け、日本との国交も断絶してしまった。多数の人々が捕虜として日本に連れ去られたが、その1人である姜沆カンハンは藤原惺窩せい かとの交流を通じて日本に朱子学の最新の成果を伝え、江戸時代になると朱子学は幕府公認の学問とされるに至った。

朝鮮通信使を通じた日本とのつながり

豊臣秀吉の死後、17世紀初めには徳川家康が実権を握り、江戸に幕府を開いた。徳川幕府は朝鮮との国交回復を望み、対馬を治める宗氏に朝鮮との交渉に当たさせた。朝鮮国内ではこうした動きに対してさまざまな議論がなされたが、最終的に日本側の求めに応じ、国王の使節を派遣することとなった。のちにこれが通信使とよばれるようになり、以後19世紀初めまでに計12回の通信使が来日し、朝鮮国王の国書を徳川将軍に届けた。

通信使は、先進的な文化や学問の伝達者として、また珍しい異国の風俗を見せてくれる者として、江戸へ向かう途中の日本各地で歓迎を受けた。またこの時期には日朝双方の間で貿易も盛んにおこなわれた。朝鮮半島南端の釜山には倭館とよばれる日本人の居留地が形成され、対馬の役人たちが外交や貿易の業務に従事した。いわゆる「鎖国」の時代の日本にとって、国書を交換するような正式な国交を結んだ国は朝鮮だけであった。